

### 11 MRSAによる化膿性腸間膜リンパ節炎から腹膜炎をきたした症例

小林久美子・内藤 真一・新田 幸壽  
 飯沼 泰史\*・小林 玲\*\*・冠木 直之\*\*  
 新潟市民病院小児外科  
 同 救命救急センター\*  
 三条総合病院小児科\*\*

症例は2歳、女児。1年前にMRSAによる膿瘍疹にて入院治療の既往があった。1週間の不明熱の後に、腹痛、嘔吐が出現し、白血球41360、CRP 21.45と上昇した。CTにて急性虫垂炎、腹膜炎の疑いで当院に救急搬送され、緊急手術を施行した。多量の膿性腹水を認めたが、虫垂は正常であった。回結腸間膜のリンパ節が3cm大に腫大しており、内部から膿の流出を認めたため、腹膜炎の原因は化膿性腸間膜リンパ節炎と判明した。術中採取した膿よりMRSAが単独で検出された。術後経過良好にて退院した。MRSAによる化膿性腸間膜リンパ節炎から腹膜炎をきたし、緊急手術を施行した症例を経験した。

### 12 変わってきた臍ヘルニアの治療 — 見直されてきたテープ固定療法の治療経験 —

内藤万砂文・広田 雅行  
 長岡赤十字病院小児外科

臍ヘルニアは新生児期からよくみられる病態である。2歳までにその多くが自然治癒するため、これまで自然経過観察が一般的に行われてきた。しかし「おんぶ」の安全性には問題があり、その存在は母親および患児のQOLを下げることになる。また長期間のヘルニアの結果、ヘルニア門が閉じても皮膚のたるみが残り「臍突出症」として結局形成手術を要する例もまれではない。近年、テープ固定療法の有効性（100%治癒）が報告され、実際にテープ固定を行っている小児外科施設が増加している。

今回、当施設で行ったテープ固定症例を供覧し、その有効性について検討したい。

### 13 小児総胆管多発結石症に対し鏡視下総胆管切開結石除去術を施行した1例

奥山 直樹・窪田 正幸・八木 実  
 金田 聡・山崎 哲・田中 真司  
 新潟大学大学院小児外科

症例は12歳女児。腹痛にて近医受診しCT、Echo、ERCPにて多数の結石を胆嚢及び総胆管内に発見された。ENBDチューブを挿入された状態で手術目的に当院転院となった。鏡視下に胆摘、続いて総胆管を切開、造影を行いながら鉗子を用いて結石を除去した。総胆管は一期的に閉鎖した。術後胆道造影で右肝管内に嵌屯した結石を認め、第12病日に再度、鏡視下総胆管切開結石除去を施行した。再手術時軽度の癒着が認められたが、フィブリン糊を塗布していたため総胆管部の癒着はなく、右肝管分岐部の直上で総胆管を開き結石を除去した。術後経過は良好でありENBDチューブを第6病日に抜去、経口を開始した。摘出した結石はコレステロール結石であった。

### 14 最近経験した乳児神経芽腫3症例の検討—縦隔原発病期IV手術例、マスキリング発見縦隔原発手術例および副腎原発経過観察例

内山 昌則・篠永 真弓\*・須田 昌司\*\*  
 渡辺 健一\*\*・浅見 恵子\*\*\*  
 窪田 正幸\*\*\*\*・金田 聡\*\*\*\*  
 山崎 哲\*\*\*\*  
 県立中央病院小児外科  
 同 胸部外科\*  
 同 小児科\*\*  
 県立がんセンター小児科\*\*\*  
 新潟大学大学院小児外科\*\*\*\*

本年4月より病態が異なる3例の乳児神経芽腫を経験したので報告する。

〔症例1〕生後8ヵ月女児、生後7ヵ月径約2cmの右大腿部皮膚腫瘍切除を受けたが神経芽腫転移巣の診断で本年4月に当小児外科紹介された。胸腹部単純XPで左胸部と左頸部、右腹部などに石灰化陰影がみられた。VMA；HVAは62.1；52.9/クレアチニンと上昇し、NSEは21ng/mlと上昇